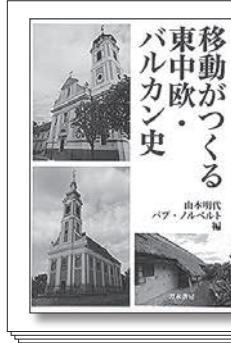


移動がつくる東中欧・バルカン史

山本 明代 パプ・ノバルト編
刀水書房 2017年



名古屋市立大学大学院人間文化研究科 院生
牧 真吾

本書は、東中欧・バルカンを専門とするハンガリーと日本の研究者による二〇〇七年から一四年の共同研究の成果をまとめたものである。一〇の論文で構成されており、それぞれの論文は、独立したテーマで書かれているが、対象となる地域が重なり合っている。そして、この地域に存在する諸集団や、「国家と地域」、「国家と民族」、

「国家とコミュニティ」との関係性などに焦点をあてながら論述している。

まずは、一〇の論文の概要を記す。

第一章

「ハンガリーのバルカン半島へのアプローチ」

パプ・ノバルト（木村真 訳）

この論文では、一二世紀以降の歴史の経緯を踏まえたうえで、ハンガリーのバルカン半島との関係性における現代的な課題にアプローチしている。バルカンといわゆる西欧との間に位置するハンガリーは、千年にわたって、「堰のような役割を果たすこともあれば、出入り口となることもあった」という。

今の主権と国境が定められたトリアノン条約（一九二〇年）の結果、かつてのハプスブルク君主国（以下「君主国」）時代にハンガリーの領域内にいた二五〇万人の市民が、今は国外に居住している。ハンガリーは、トリアノン条約のトラウマは克服できずにいるという。また、安全保障の問題だけでなく、水政策やエネルギー政策でもバルカンとの関係性は重要性を増している。

それにも関わらず、著者は、社会主義体制からの転換以降、西欧

に対する向き合いに比較し、ハンガリーの政治エリートが、バルカンについてほとんど知らないという現実を憂慮している。

第二章

「ハンガリーへのクロアチア人移民——一六世紀から一八世紀」

キタニチ・マター（秋山晋吾 訳）

この論文は、ハンガリーにおけるクロアチア移民について詳細に論じている。

著者は、二〇世紀初頭のバルカンの民族分布の原因をオスマン帝国のハンガリー進出のみに求めるのは誤りであるとしている。そもそもバルカンには、一五世紀以前から様々な民族集団が住んでいたが、一六世紀から一八世紀にかけて、オスマン帝国の拡大とハンガリー王国の縮小、その後の君主国の拡大とオスマンの退潮という二つの逆方向の動きのなかで民族集団が移動していった。

著者はこうした動きのなかで、現在のクロアチア人と呼ばれる民族に同化していく様々な集団の動きを軸にして論じている。さらに、現在のハンガリー国内に居住するクロアチア人も、実は様々な出自であることを明らかにしている。

クロアチア語を話すフランシスコ会の修道士が、クロアチア人の

アイデンティティ形成に大きな役割を果たしたということも重要な点であり、一八世紀から二〇世紀にかけてクロアチア人の国民意識が形成されたことを、改めて認識させる内容となっている。

第三章

「第二次大戦後チェコスロヴァキアとハンガリー間の住民交換の社会的影響」

山本明代

この論文は、一九四六年に国家間で調印されたハンガリーにおけるスロヴァキア系マイノリティとチェコスロヴァキアにおけるハンガリー系のマイノリティを住民交換した際の影響や問題点を論じたものである。

チェコスロヴァキアに向かったスロヴァキア系住民の場合は、自発的な移住者が多かったというが、それでも事前に受けた説明通りの土地が得られないなどの問題があった。まして、チェコスロヴァキアからのハンガリー系住民の移住は、強制的であった。いずれにしろ、住民交換は、望むような祖国への帰還ではなく、単なる再定住であり、新たな土地では、農業の方法から地域コミュニティさらには宗教等において適応を迫られることになり、結局は、同化は難

しく新たなマイノリティ集団を地域社会に出現させることになったという。

国民国家の成立にともなう国境線が引かれた後、マイノリティを、強制的または半強制的に交換するというのは、一九二三年に、トルコとギリシャ間で行われた住民交換を嚆矢とするという。この住民交換は、当時の国際連盟難民高等弁務官事務所が提案したもので、その後の世界各地で行われた住民交換のモデルにもなっている。こうした住民交換は、「小さな犠牲で大きな犠牲を救う」という評価もありうるが、ノーマン・M・ナイマークは、『民族浄化のヨーロッパ史』のなかで、ギリシャ側でもトルコ側でも移住してきた新たな「難民」と地元民とのあいだでの対立が今日まで続いていると述べている。

この論文においても、住民交換が、国家や国際社会が意図するようなマイノリティ問題の解決にはならないことを改めて指摘している。

第四章

「二八世紀中期ハンガリーの『ギリシャ商人』居住地分布——一七五五年調査記録から」

秋山晋吾

この論文は、一八世紀以降、オスマン帝国と君主国間に安定的な

交易関係が成立したことに伴い、ギリシャ商人が、ハンガリー領域に居住しながら商業ネットワークを形成していったことを当時のハンガリー総督府の調査から論じたものである。

この時代、ハンガリーは、バルカンと西欧間の貿易の中継地となり、その担い手であるギリシャ商人が、ハンガリーの北西部、西部を中心に居住していた。論文では、ドナウ川沿い、大平原、ワイン産地の三つに分けて概観している。さらに、ギリシャ商人は、ネットワークを張り巡らし、地域経済においても重要な役割を担っていたという。

なぜギリシャ人が、ハンガリーにおいて、商業ネットワークを築くことができたのかといった理由や背景についての考察を今後期待したいところである。

第五章

「ハンガリーのクロアチア人エスニック集団の多様性と移住・統合過程」

シヨクチェヴィチ・デーネシュ

(山本明代 訳)

第三章の論文でも、クロアチア人の出自が多様であることが論じられたが、この論文では、ハンガリーやその周辺のクロアチア人が、

七から一二のエスニック集団に分かれていた状況を具体的に論じている。もともとは、ブニエヴァーツ人、シヨカートン人、カトリック系ボスニア人、ダルマチア人といった人々が、カトリック教会に帰属するという共通点を軸に、一九世紀から二〇世紀にかけて、クロアチア人に形成されていったという。

しかし、クロアチア系貴族は早い段階でハンガリー化し、第二次大戦後の一時期、クロアチア人の文化的再興の機会もあったが、それもソ連とユーゴスラヴィアとの関係が悪化すると、社会主義独裁体制下のクロアチア人共同体も打撃を被った。

著者によれば、体制転換後の現在、一九八三年に制定されたマイノリティ法で、合法的かつ民主的に選ばれた政治組織が結成されたり、学術・文化の面でも活動が広がったりしつつあるものの、その一方で、ハンガリーへの同化の過程も止まっていないという。

第六章

「バルカン地方の野菜栽培人の移動——一九世紀から二〇世紀初頭」

木村真

この論文は、現在のブルガリアにあたるタルノヴォ地方からハンガリーなどへの野菜栽培人の移動

について論じたものである。当時ブルガリアは、オスマン帝国の統治下だったが、出稼ぎや季節労働が大規模に行われるようになっていた。第四章のギリシャ商人もその一つだったが、様々な職人、刈り入れや綿の摘み取りなどの農業労働への従事など、多岐にわたったという。

このうち、野菜栽培人は、親方を中心に集団を組織し、親方は、出稼ぎの全行程に責任を持ち、必要な物資の調達などの準備をした。

重要な指摘は、バルカン半島の出稼ぎ人は、必ずしも生活の困窮する貧困層が中心になって組織されていたわけではない点である。むしろ親方の存在のように、ある程度の財産があれば出稼ぎ集団を組織することはできなかったという。

第七章

「クロアチア多民族社会におけるセルビア人の自決権——領域的自治の限界と文化的自治のジレンマ」

百瀬亮司

この論文は、ユーゴ紛争のうち、クロアチア内戦の要因になったクロアチアにおけるセルビア人自治区の問題を取り上げている。

多民族国家であった旧社会主義ユーゴスラヴィアでは、自治の主

体を領域的である共和国に置くという「属地主義」をとっていたが、同時に各地における民族的コミュニティを認める「共和国——コミュニティ二元体制」を採用していた。共産党政権下では、民族差別は徹底的に排除されるという前提のもと、クロアチア共和国に住むセルビア人も民族自決権を行使することができた。

しかし、一九九〇年に、民族主義政党の党首トウジマンが大統領に選出されると、憲法が修正され、「クロアチアは、クロアチア人とそのほかの諸民族ならびに少数民族の国家」と規定された。すなわち、セルビア人は、クロアチア人と同等の構成民族から「降格」させられた。それにより、両者の対立が激しくなり、セルビア人の自治区独立の動きが強まり、東スラヴォニアでは、クロアチア人や非セルビア人数百人の殺害事件も起きた。一方、アメリカ軍の支援をうけたクロアチア軍は、クライナからセルビア人を一掃した。

内戦終結後は、クロアチア人とセルビア人との多民族共存社会の実現が求められるが、著者は、直接的な紛争の相手だけに文化的な自治の構築は困難である厳しい現状を指摘している。

第八章

「困難な不均衡——ユーゴスラヴィアの国家形成とマケドニア（一九一八—一九三九年）」

ピーロー・ラースロー

（山崎信一 訳）

この論文は、第一次大戦後に誕生した多くの新国家の中でも、特にユーゴスラヴィア（建国時は「セルビア人・クロアチア人・スロヴェニア人王国」）が、誕生時点から有していた課題を、マケドニアの例を通して論じている。問題は、単に民族の多様性だけでなく、異なる住民の間の生活水準の著しい不均衡さにあった。

マケドニアは、統一以前、セルビアとの結びつきは弱かったにもかかわらず、住民はセルビア人とみなされ、少数民族としての権利を適用されることはなかった。その一方で、マケドニアへの投資の水準は、他の地域より低く、最も後進的な地域であり続けた。さらに就学していない子供も多く、公用語の「セルボ・クロアチア語」を理解できなかったという。教員も罰としてマケドニアに送られてきており、「ユーゴスラヴィアのシベリア」だった。

社会主義政権になり、格差の縮小を促進しようとする努力があったものの、成功を収めたわけではな

く、一九九一年にマケドニアが独立を宣言した後も様々な課題をかかえている点を明らかにしている。

第九章

「ボスニア・ヘルツェゴヴィナの国家性——ハーツホーン・モデルを手がかりに」

レメニ・ペーテル

（百瀬亮司 訳）

この論文は、ユーゴ内戦のなかでも最も多くの犠牲者を出したボスニア・ヘルツェゴヴィナの国家性に関する問題点を、アメリカの政治地理学者ハーツホーン・モデルを援用しながら論じている。

旧ユーゴスラヴィアの各共和国は、事実上行政区画として機能してきたため、境界線は、エスニックな境界線とほとんど一致していなかったが、旧ユーゴスラヴィアの崩壊にともない、唐突に国際的国境線となった。ボスニア・ヘルツェゴヴィナでは、特にそれが大きな問題となり、セルビア人勢力、クロアチア人勢力、ボシュニャク人勢力の間での三つ巴の紛争や民族浄化が起きた。

最終的に、一九九五年の Dayton 和平合意で、ボスニア・ヘルツェゴヴィナ連邦とスルプスカ共和国というふたつの半独立状態のエンティティからなる共和国が、国際的に認められた。著者は、この国における遠心的な力と求心的な力を分析している。遠心的な力としては、セルビア人とクロアチア人には、それぞれ自身の同胞が支配的である国が、すぐ隣に存在している。一方、ボシュニャク人はそれを持たず、その立場の差が歴然としているという。結局のところ、EUなどの国際社会の意思がこの国の分裂を防いでいると、著者は指摘している。

第一〇章

「ユーゴスラヴィア継承諸国における歴史教科書の叙述とその特徴」

山崎信一

この論文は、旧ユーゴスラヴィアの継承国家における教科書を比較分析するという非常に興味深いテーマを論じている。

当然のことながら、各国では、アイデンティティの形成のためにも、教科書で、自国民の歴史に言及している。

著者によれば、例えば、セルビア人の教科書とクロアチア人の教科書で、相互に矛盾する叙述が見られるという。また、現在の国家領域と歴史的な領域が異なることがしばしばあるが、教科書では、現在の領域に暮らしている人々の歴史は語られず、主に過去から継

続している自国民の歴史が語られている。さらに、マイノリティの存在については、ほとんど言及されないか、かりに恣意的に言及される場合は、否定的な文脈においてであると指摘している。

著者は、歴史の叙述には、マイノリティの視点を包摂していくことが重要であると述べている。

一〇の論文は、それぞれが独立しているが、ハンガリーの研究者の論文が半数を占めていることから明らかのように、東中欧とバルカンの中間に位置するハンガリーからの視点が重視されている。日本の研究者との長年の共同研究においては、分析や考察をめぐって議論が繰り返されたということだが、それを踏まえたいえでの拠点の異なる二つの国の専門家の新たな見方や知見に触れることができるのも、本書の大きな楽しみと言える。

また、もう一つの特徴は、本書のタイトルにもあるように「移動」に注目した論文が多いことである。

バルカンからハンガリーにかけては、最近のシリア難民の動きにおいても回廊になっており、現在も「移動」がこの地域の重要なキーワードだ。

一般に、定住する人が豊かであつ

て、出稼ぎであれ、商人であれ、場合によっては難民であれ、移動する人々が貧しく不幸であると思なされがちである。もちろん、民族浄化や強制的な住民交換など、負の側面もあるが、その一方で、本書で取り上げられているバルカンにおける商人や野菜栽培人の動きなど、積極的でダイナミックな移動もあり、それがこの地域の多様性や豊かさにつながっていることを改めて認識することができる。

イギリスの歴史家マーク・マゾワは著書『バルカン』のなかで旧ユーゴスラヴィア紛争について触れ、「これはヨーロッパの過去だったのか、それとも未来だったのか？」と問いかけている。

NATOの空爆など戦闘が激しかった時期は、この地域もメディアに多く取り上げられ、日本人の関心もそれなりに高かったが、昨年一二月に共同通信が配信した「旧ユーゴ国際戦犯法廷が閉所」の記事は、新聞の国際面に小さく掲載されたにすぎなかった。

確かに、東中欧やバルカンは、距離的にも心理的にも日本から近くはない。だからと言って、この地域で起きていることに目を向けることをやめていいわけではない。なぜなら、マゾワが言うように、バルカンで起きていることは、ヨー

ロッパの（そして世界の）未来なのかもしれないのだから。

そういった意味でも、本書は、この地域に関心をもつ人だけでなく、多くの人に手に取ってもらいたい一冊である。